

## ほべつ銀河鉄道の里づくり委員会

北海道むかわ町

### 【活動概要・効果】

#### ☆住民参加による旧駅舎・公園・花壇の整備

○旧国鉄富内駅舎及び構内、鉄道用品の整備と管理、親水公園及び花壇「涙ぐむ眼」の植栽、草刈り等の管理、富内農作業準備休憩施設の管理、見学者の対応を継続的に行っており、地区内の若手グループと連携を図りながら活動の推進にあたっている

☆廃線した路線と駅舎を産業遺産として保存し、地域の宝とする取り組みを実施している。映画という新たな資源の可能性も生まれつつあり、限られたメンバーで地域を育てていくためのコミュニティづくりを進めている。

☆宮沢賢治設計花壇「涙ぐむ眼」は地区のシンボリック的存在になり、子供からお年寄りまで、福祉施設の園生など、地域住民総出による花壇植栽作業は地域の風物詩となり、地域住民の一体化が図られている。

☆世代を越えた幅広い地域住民が参加することにより、住民一人一人に活動目的や理念が認識されており、地域住民の精神的なつながりの強さや深さが浸透し、住民に地域づくりの原点が根付いている。



花壇「涙ぐむ眼」

### 《人員確保での工夫・苦労》

地区住民全員が委員会の会員であるが、新たな住民が増えない中で高齢化によって会員も年々減少している。発足当初“若手”とされたメンバーも高齢化の域に達してきており、世代交代が必要不可欠な中で問題を解決する方策は見つからない。限られたメンバーで地域を育てていくためには、これまでの実績を活かして、内外のネットワークによるコミュニティづくりを一層進める必要がある。

### 《活動資金確保での工夫・苦労》

住民から集める会費や行政からの公園管理の委託費などで花壇の維持管理やイベント開催などを具体的な事業として行っている。平成13年には富内線の廃線15周年と同時に21世紀最初の年であったことから「よみがえれ！汽笛」と題した1日だけのSL復活募金キャンペーンを実施し、2001円以上の募金者にテレホンカードを配付するなどにより資金確保に努めた。

### 【現場の声】

過疎化や高齢化の中で町が寂れることに対する危機感が特に強い富内地区においてS61の鉄道の廃線は絶望感と恐怖感すら感じさせた。その中で、当時の若い住民を中心に最後の汽車を見送るフェスティバルを自主的に開いたことが今につながる地区づくりの発端となった。それまで自主的な集まりだった組織を学校や自治会、その他の各種団体などを入れた「銀河の里づくり委員会」として改組することにより現在に至る活動の基本ともなっている。住民が独自に策定した最初の構想は観光振興の色合いが濃いものであったが議論を重ねた結果、豊かな暮らしを基本とする生活環境全体の改善をめざす施策・事業を推進している。様々な住民が運営に関わる委員会形式にすることにより地区住民が暮らし方の基本となる精神を共有することができている。

～ほべつ銀河鉄道の里づくり委員会  
会長 加藤 勉さん



花壇植栽風景